青年の自己同一性と社会的環境

野　辺　地　正　之

青年期と環境的状況

現代の青年をとりかこんでいる社会的状況は，一言でいうならば著しい人間疎外の状況である。それはいわゆる高度経済成長政策，繁栄のもとでの物質的文化，急速な都市化あるいはモータリゼーション，急激に進んだ技術革新などによってもたらされた産物の一つであるといってよい。そしてこのような状況の中に生まれ育ったのが現代の青年である。現代青年の精神的状況としてしばしば言われる「生き甲斐の喪失」「無力感」「脱力感」「しらけ」などは，実に彼らをとりまくこのような環境的状況によって形成されたものであり，自己の確立の前段階におかれている青年前・中期の若者にあっては，このような状況の中に置かれていること自体が無感動・無気力・空虚感・不充実感をもたされずにはおられないのである。

巨大な機構の中に存在する人間が，自己の稀薄化を体験し，次第に自己の意志や感情によって行動することを止め，自動人形 Automaton に陥る傾向については，フロム[1]なども指摘するところであるが，このような自己疎外的状況がもたらす影響は，成人よりもむしろ青年期にある者にとって著しいものと考えられよう。

青年期は環境的変化に敏感であり，それに対して感受性が強い時期である。特に現代社会がもつ移行性と変化性ないしは不安定性，例えば環境の

変化速度の大きいこと，生活の空間的移動量の大きいこと，政治的混迷，経済的不安，イデオロギーの乱立と対立，思想・文化の多様性，環境的刺激例えば情報量の過剰は，その中に置かれている青年の環境的適応性を著しく阻害するものであり，特に自己同一性の形成と確立という発達的課題の達成を迫られている青年中・後期の人々にとって，現代の社会的状況のもつ複雑かつ不安定な特性は，他の発達段階におかれている人々以上に多くの困難な問題を投げかけているものといえるであろう。

いうまでもなく青年期は，自我の覚醒，とりわけ青年前期に開始される「自己への探究と模索」あるいは「自分とは何であるか」という自己に対する問いかけがその解答を求め，自分なりの自己像 self-image を形成し，それを何度か修正しながら，次第に「現実の自己 real self」と「理想の自己 ideal self」とが相互に接近し，自己同一性の確立へと進んでゆくのである。

しかし，このプロセスは決して平坦なものとはいえないのであって，特に青年期には自己をとりかこむ環境的状況によって，自己同一性の確立への過程には幾多の多様性が見られるのである。また青年の個体的な差異もあって，大衆社会状況の中に埋没し，あるいはそれに順応し，矛盾や葛藤を体験することのないもの，社会体制に無関心なもの，これに反発し意識的に逆行しようとするもの，またはこれを打破し崩壊させ改革してゆこうとするもの，など行動型の多様化[8]も見られるのである。

現代の社会的状況と自己の形成

高度経済成長政策が推進された昭和30年代に生まれたのが現代の青年である。急激な都市化とモータリゼーションの犠牲者たちといってよい。遊びの空間と時間の剝奪が彼らを不幸に陥れた。都市化は子どもたちの遊び

場所であった空地や広場を奪い，工場や巨大な高層アパートやマンションが建てられた。こうして「家の中で遊ぶ子ども」が増加した。遊び場を失い，交通戦争の恐怖から必然的に親は子どもを家の中に閉じこめたのである。他方核家族化は同胞間の接触を極端に乏しくさせ，子どもは一人遊びを余儀なくさせられる。家の中で遊ぶ子どもに「人見知り（対人不安）」「言葉の遅れ」「指吸い」などの徴候が増えた。一方では「家の中で遊ぶ子ども」の非社会性が問題になる。そこには，自己同一性の形成に必要な他人への同一化の不能あるいは社会的ルールの学習不能が問題にされる。また「家の中で遊ぶ子ども」は「社会的孤立児」を作り，今日ではギャング・エイジの欠如さえ問題にされている。このようにして生まれるのは「遊びを知らない子ども」むしろ「遊び方を知らない子ども」であり「遊べない子ども」である。そしてそれは集団生活あるいは学校生活への不適応を招き「登園・登校拒否」「学校嫌い」もしくは「学校恐怖」を生むに至ることも珍しくはない。他方，「社会的孤立」は他人に対する過剰な緊張や不安を形成し，幼児期に形成された人見知りや他人に対する異常な緊張感が，青年期にみられる「対人恐怖（赤面恐怖・正視恐怖・自己臭恐怖など）」を招来する場合も稀れではない。

また子どもの時期から社会化されないままの歪んだ未熟な自我が，青年期になって家庭の中から外部の社会に押し出されて，家族や家との心理的分離が出来ないままに社会的状況の中に放り出された場合に，他人の中で自分がどのように行動したらよいかが分らず，また他人の行動についての正しい認知や評価が不可能であり，徒に混乱するのであって，結果的には対人的状況の中に留まることを恐れて，自己の殻の中に逃避したり，自閉的になったり，自己中心的な生き方や世界観を形成するに至り，また時には周囲のだれかれの見境いなく攻撃的な感情を抱くようになることも稀れではない。

現代社会の疎外的性格

高度経済成長政策は現時点では行き詰まりを生じたとはいえ，それは一方において物質的な豊かさをもたらし，消費文化を生み，一見繁栄を生み出したかのように見えるが，他方においては著しい人間疎外の状況をも生み出したのである。

その主なものは，(1)企業の集団化(2)機械化，それらから結果する(3)人間の孤立化 (4)人間尊重の観念の低下などである。産業界にみられる高度な技術革新，企業にみられる大規模な組織化，構造社会，大資本とテクノロジーの異常な発達がその背景に存在するものといってよかろう。これらは，その中で社会生活や職業生活や学業生活を続けようとする青年に多大な影響を与えずにはおかないものなのであって，現代青年に多く見られるところの「生き甲斐の喪失」「無気力感」などは多分にそれに基づく反応であるといってよいであろう。なお，無感動・空虚感・不安定感・自主性の欠如などもそれに無関係ではあり得ないであろう。

人がある社会的組織あるいは社会集団の中におかれていて，自分がその中で疎外されていることを意識した場合に，自分が「はみ出した存在」すなわちアウトサイダーとしての疎外感を体験するのであるが，この疎外感は自分が余分な存在，無用な人間としての認知によって生じるものであり，このような体験が無気力さ・無責任性・自己あるは他者に対する偏見・自己あるいは他者に対する攻撃的傾向を生みやすいのである。

疎外的状況に置かれた場合，人は自分自身を能動的な立場にある者としての認知あるいは自らの行為の主体的創造者としての経験をもつものではなく，むしろ逆に行為やその結果が主人公となって，自己自身はそれに従属するものといった主客の転倒がみられ，また疎外されている者は，自己

自身もまた他の人間と触れあい，関わりをもつことが出来ないのである。

このことは，結果的には自己自身の疎外すなわち自己疎外 self-alienation をもたらし，人は自分自身で考え，自分自身で決断し，自分自身で感じるのではなく，他人（ひと）が考え，決断し，感じるその事に受動的に順応しているに過ぎず，作為体験的な傾向が進行し，ここでもまた無気力・無関心・受動的同調などに陥りやすいのである。

ホルネイ[3]は自己疎外の徴候として，意識的経験に必要な一般能力の障害，自己の身体的欲求・身体・感情についての認知や関心の低下，生活上の能動的な決定能力の存在についての意識の障害，などを挙げている。これに関連して，自己疎外状況におかれた青年の反応をわれわれの臨床的な資料をもとに要約してみると，次のような諸傾向を挙げることが出来る。

(1) 感情的反応の自発性が弱まり，あるいは失われる。

(2) 自己尊重の観念（自尊心）の低下，あるいは喪失。

(3) 生活のエネルギーあるいは生命感の喪失。

(4) 自己のもつ能力の客観的評価あるいは正しい認知の不能。

(5) 自己の行為に対する責任感・責任能力の喪失。困難な問題に直面した場合に，責任を回避しようとするために実行不能に陥りやすい。

(6) 自己偽瞞・自己縮小・自己過小視・自己卑下・自己拡大・自己過大視など，ありのままの自己評価あるいは現実的自己認知が出来ず，自己への偏見や自己認知の歪みが発展し，自己客観視 self-objectification の発展が阻害される。

(7) 現実的・客観的に自己を承認出来ないという傾向は，他者の正しい評価や承認をも不能にさせ，他者への偏見あるいは蔑視もしくは，他者への不安あるいは恐れを生じ，他人への適応を困難に導く。

(8) 自己決定が出来ず，自分の行動を他人の意見や判断あるいは期待に従って決定しようと試みる。いわゆる「他者志向的 other-directed な

傾向[4]」を示し，あるいは「魔術的援助者 magic-helper[5]」を必要とする。

(9) 運命や時間が解決してくれる，といった運命論的態度あるいは宿命観。

(10) 権威に服従しようとする「権威主義的傾向」の強調。自分の意志と権威からの期待が矛盾する場合には，自分の意志を抑圧して権威の要求に服従する。

(11) 他人への同調によって不安を解消しようとする傾向。「自動人形的同調性 automaton conformity[6]」に見られるように，はみ出す恐れを回避するために，他人に期待される通りの行動をとろうとする。

青年の自己疎外を生じる社会的状況として，消費に対する過剰欲求をもたらすレジャー・ブームと情報の過剰がある。そしてそれらの主要な受け手は青少年層である事も見逃すことが出来ない事実である。情報の過剰は，その取捨選択の困難なことによって情緒的な混乱や不安いらだちを増大させ，あるいは刺激の感受性の鈍麻を生じ，また現実感の稀薄化を導く場合も少なくない。更に過剰な視聴覚的情報は論理的思考よりも感性的直観を発展させる傾向をもたらすことも指摘されている。また情報産業の著しい進展は，例えばラジオやテレビの深夜番組の如く，性的刺激その他の欲求を昂進させるものである点も否めない。

情報は一般に社会的視野の拡大をもたらすが，雑多な情報を適切に処理する能力を欠く場合には，情報の過剰はむしろそれに害され，自己形成にマイナスによる場合すらありうるものと思われる。

現代社会において疎外を生み出す状況の一つは「競争の過剰」である。就職あるいは進学は青少年に重苦しい圧迫となり，「灰色の青春時代」を現出させている。もちろんその背後には，大多数の少年少女が高校あるいは大学に進学したいという希望をもつ時代的風潮，いわゆる高学歴社会化

があるであろう。昭和40年における大学進学率は18歳の女子の4.6パーセント，男子の20.7パーセントであったのが，50年には女子の12.5パーセント，男子の40.4パーセントに急増しているのをわれわれは見るのである。このような傾向を支えているのは，もちろん勉学への欲求もあるのであろうが，やはり高等教育を受け，有名校の卒業生，あるいは大学卒でなければ社会的地位が保証されにくいという現代社会の風潮であろう。つまり進学に伴う競争も，その背後にある学歴主義の産物といえるのである。そして大学を卒業するということが社会へ出るパスポートであるという考え方が，高校を大学の予備校化し，また大学を就職の準備機関化させる結果となっているのが現状である。

そのうえ，予備校化した高校では必然的に一方的な押しつけ教育がなされ，生徒は被害者意識を強めることにもなりやすい。特に大学進学を一つの目標においたいわゆる受験校ともいうべき高校にあっては，教師や仲間との心の触れあいや深い友情も発展しにくく，教師は権力者であり級友は競争相手であるという意識を生じやすいといわれる。このようにして，自分が学生であり生徒であるという事柄自体が，被害者であるという意識を抱きやすいといえよう。特にこれは同じ高校生でも定時制の場合では，一般社会の無理解や雇用者側の偏見のため，劣等感に基づく疎外意識をもちやすい。

都市化に見られる自己の変容

生活の都市化と青少年の都市集中化は昭和30年代からの高度経済成長傾向と技術革進に伴って急速に進展した。人口の地域的移動の激化は，人口10万以上の都市住民の全人口比が，1960年に43パーセント未満であったが70年には50パーセントを越えるに至り，6大都市圏の人口が全人口の37パ

ーセントに及んでいることによっても窺い知ることが出来るのである。

人口の都市集中化の中心では青年であり，しかも青少年の場合は，都市生活に対する魅力，文化的・娯楽的刺激への志向，都市生活の便利さ，諸欲求の充足などの理由から，都市からの離脱傾向はむしろ少ないといえよう。

都市化は人口の過密化をもたらす。過密状況がストレッサーとして有機体に及ぼす影響に関しては，クリスチャン[7]あるいはカルホーン[8]などの動物実験による研究によっても示されるが，ストレス源としての過密が人間の精神に及ぼすひずみについても十分考慮されねばならない。クリスチャンあるいはカルホーンは共にラットを用いての実験であるが，そこにおいては過密のストレスによる副腎皮質の肥大，妊娠率の減少，流産率の増大，同性同志の性行動，育児能力の消失，畸型の増加，攻撃的行動などが顕著に見出されている。

青少年の都市集中化に伴い，都市生活に独特な孤立化が出現し，職場あるいは学校で心をうちあけて話しあえる友人がいない，という悩みが数多く挙げられる。心をうちあけうる友人がいない悩みは，職場の青少年においても高校生・大学生においても悩みの上位に挙げられるものであることは種々の調査の結果において示されているところである。

そして，このような孤立化は人間同志の断絶感を生じ，信頼出来るのは自分だけしかないという他人への不信感を醸成し，自己防衛の機制として自己閉鎖的傾向を生み，他人に対する警戒的態度や皮相的な人間関係を保とうとする態度，またその結果として生じる対人不安や対人恐怖症的傾向が強化される場合もありうる。

また，それに対する反応として，ドライに生きようとする生活態度や，他人に対するコミットメントを回避しようとする生活方針が発展する場合もあって，打算的・功利的人間関係に陥りやすく，人間的連帯感を喪失し

やすい。従ってこのうな社会的状況の中では，他者への同一化やモデリングも生まれにくく，自己同一性の発展にとっては著しい障害となるものといえよう。

現代社会の流動的状況

都市化社会は流動的状況であって，そこでは絶えず変化して止まない現実が存在する。一般に変動する社会的環境におかれた個人が情緒的不安感を体験する事はいうまでもないことであるが，環境の変化に敏感に反応する青年期にあってはその行動も不安定化しやすいものである。

現代の青年の社会的不適応を生み出す条件には種々のものを考えることが出来るが，次の如きものを挙げることも出来るであろう[9]。

(1) 時代の変化のテンポが速いこと。政治・文化・思想などの変貌が速いことは，世代間の隔絶や思想的断絶を生み，またこのことは人生に対する時間的統一原理を崩壊させるものであること。

(2) 生活環境の移動の激しさ。農村から都市への移住，職業生活に伴なう転勤，大学入学に伴う移動が青年の新しい環境への適応を困難にさせ，古い生活習慣を捨てる必要性が生じる。それと同時に青年は新しい環境に適応する柔軟性を必要とする。

(3) 文化の多様性と刺激の過剰。一つの時期，一つの社会内において多様な思想と文化が混在すること，文化的な刺激が過剰であり，青年が受ける文化的刺激が多面的であること。このような刺激の過剰な状況に直面して，種々の神経症的徴候が現われやすいこと。

(4) 教えられる理念と与えられる現実のギャップがはなはだしいこと。一般に青年は良心的・非妥協的であるから，理念的に教えられたものと現実に与えられたものとのはなはだしい不一致についてのいらだちを一

挙に解決しようとして，狂信的な革命運動に突入したり，法律や道徳を無視したりする無軌道な短絡行動に進みやすい。あるいは現実から逃避的になり，自分ひとりの理念的な世界に閉じこもろうとして結果的には利己的な行動に陥る者も少なくない。

以上に加えて交通の発達が都市化を一層促進させ，それは生活様式の急激な変化をも生じ，それに順応出来ないために青年の生活がごく皮相的な段階での追求に留まり，人間的な豊かさの追求にまで至らず，他人の模倣と外面的虚飾に流れていることも青年の自己確立の乏しさに関係ないとはいえないのである。

「若者文化」と「遊び」における自己の形成

カイヨワによれば[10]，1960年代後半以降青年の「遊び」への志向が強まり，それに伴って若者文化 youth culture の自立的傾向――成人文化からの離脱と対立――も顕著になってきたという。「若者文化」は本来「成人文化」と対立するものであり，二つの文化の間のコンフリクトの激化に伴い，成人と若者との断絶は著しく拡大されてきたといわれる。また彼によれば，成人の文化は「聖」と「実利」のなれあいの「俗」の原理によって支配され，それとの対立によって生まれた若者文化は「遊び」の原理に支配され，競争 Agôn・賭け Aléa ・模倣 Mimicry・めまい Ilinx の四つの要因から成立するものとされている。競争はスポーツをすること，マージャン，玉突きをすること，賭けは偶然性を尊重すること，模倣は演劇への興味，革命ごっこ，スターやチャンピオンへのあこがれと同一化，スポーツを観ること，目まいはアルコール・シンナー・マリワナへの耽溺，暴走，ビート音楽，ロック，ゴーゴーなどへの志向である。

若者文化は青年期の自己同一性混乱の代償あるいは，失われた自己同一

性の回復，あるいは自己実現の手段とも解されるが，パーソンズ[11]によれば，大人の期待と権威からの強迫的な離脱とそれらに対する対立，仲間集団への強迫的な同調，情緒的に重要な対象の非現実的な理想化，として捉えられる。

いずれにせよ若者文化には失われた自己同一性の回復という要因が含まれているのをわれわれは知るのである。「遊び」において青年は自己を確立しまた自己の「存在証明」を求めようと試みるのである。

若者文化は「離脱の文化」ともいわれ，この離脱の方向はかっては「聖」の方向をとったが，現代では「遊び」の方向をとるといわれる。青年と遊びの間には本来ある種の親近性が存在し，それは青年が社会的義務や拘束から自由な存在であるからと考えられている。「遊び」は人を憩わせ，くつろがせる気楽さがあり，危険や苦労から解放し，現実のストレスから自らを守る働きをもつものである。[10]

マルコム[12]はギリシャ神話中の人物を二つの類型に分け，それぞれ「ナルシス型」と「プロメテウス型」と呼び，前者にはオルフェウス，ディオニソスを，後者にはシシュフォスを配している。ゼウスによって山の頂の岩壁に縛りつけられ大鷲に肝を破られ続けるプロメテウスと，その尊大さのために神に罰せられ，永久に山の頂に岩を押しあげる仕事を繰り返えさねばならないシシュフォスは，運命の定めを背負って毎日あくせく働き続ける大人を象徴し，愉悦と快楽の日々を送るナルシサス，自らの琴の音を楽しみ続けるオルフェウス，酒神バッカスとも称せられるディオニソスは，世界を自己の延長と考え，自分で自分の生活を選び，自己の欲望に従って生きる現代青年を象徴するものとされている。ここには，ナルシシズムの抑圧に生きる大人たちとナルシシズムに生きる青年の対比が見られるのである。

現代青年がナルシストであることは否定出来ない。自分自身のことで一

杯であること，自分の目標が明確でないこと，業績と栄光についての幻想——有名になりたい，他人の注目を得たい——，それは過剰な自己への関心と拡大された自己評価である。本来ナルシストである青年は，気楽さ，自由さ，無拘束性を求めるものであるから，内的緊張の世界，厳粛性，拘束性の強い不自由な「聖」の世界からは必然的に遠ざかるのである。

遊戯性への志向は青年の傷つきやすい自我を防衛する防壁であり，青年は現実生活の中に遊びを導入することによって生活を遊戯化し，現実のストレスを緩和しようと努める。戦争中にひたすら働かされ，労苦に堪える生活を強いられた青年（現在の大人）は，遊ぶことを罪悪視し，戦後の経済的混乱と廃墟の中で遊ぶことさえ知らずに大人になった。経済的復興と繁栄と豊かさの中で，現代の青年は遊びに何一つ不自由さを感じていないのである。

しかし「遊び」が現実回避の手段となり，実生活のゲーム化，ドラマ化がある場合には，そこには現実との生き生きしたコミットメントは失われやすいことも事実であろう。実際の生活の中に存在するシリアスなものへの回避と責任の回避は，イージーゴーイングな生活体験と無責任性と，情熱や生き甲斐の喪失を招く結果になりやすいのである。こうして，自己の実存を賭けることが出来ないなまぬるい生の連続は，やがて生の実感や感動を喪失し，生きる目標を失なわせあるいは同一化の対象を喪失させる結果とも結びつきやすいのである。

〔引 用 文 献〕

(1) Fromm, E. 1941. Escape from freedom. New York : Farrar and Reinhart.

(2) これら青年の行動の多様性に関しては，西平直喜（津留宏編「青年心理学」第8講 価値と「生きがい」の探究），FMS 理論に基づく現代青年の生き方の類型化が参考になる。

(3) Horney, K. 1950. Neurosis and human growth. New York : Norton.

(4) Riesman, D. 1950. The lonely crowd. New Haven: Yale Univ. Press.
(5) Fromm, E. ibid.
(6) Fromm, E. idid.
(7) Christian, J. J. 1961. Phenomena associated with population density. Proc. Nat. Acad. Sci., 47, 428-449.
(8) Calhoun, J. B. 1962. Population density and social pathology. Sci. Amer., 206 (2), 139-148.
(9) 岡本重雄 1957. 青年期心理学, 東京：朝倉書店.
(10) Caillois, R. 1958. Le jeux et les hommes. Paris : Gallimard. 多田道太郎他訳「遊びと人間」東京：講談社.
(11) Parsons, T. 1954. Essays in sociological theory. (Rev. ed.) New York : Free Press.
(12) Malcolm, H. 1971. Generation of Narcissus. Boston : Litte, Brown. 由水常雄訳「ナルシスの世代」東京：新潮社.